令和６年度
武蔵野大学

一般選抜Ａ日程　２月５日
２時限

国語総合
《 60 分 》

【注意事項】

1．問題は28ページまでです。
2．試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
3．試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気づいた場合は、黙って手を挙げて監督者に知らせてください。
4．解答用紙（A）には志望学科１の受験番号を記入し、受験番号の下のマーク欄にマークしてください。次に氏名、フリガナを記入し、解答する時限と科目（国語総合）にマークしてください。正しくマークされていない場合には、採点できないことがあります。
5．解答は、解答用紙（A）の解答記入欄にマークしてください。例えば、 10 と表示のある問いに対して③と解答する場合は、次の（例）のように解答番号10の解答記入欄の③にマークしてください。

（例）

解答番号	解答記入欄
10	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⓪

6．問題冊子の余白等は適宜利用しても構いませんが、ページを切り離してはいけません。
7．時間内に解答し終わっても、退出することはできません。
8．途中で質問等があるときは、黙って手を挙げて監督者を呼んでください。

〔共通問題〕

〔一〕 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

かつて栄養ドリンクのコマーシャルに「24時間、働けますか」というコピーがあった。ビジネスマンのやる気を長続きさせるために、「ぜひともこの1本でエネルギーホキュウ(ア)を！」と訴えかけているわけだ。このコマーシャルの背後には、モチベーションを動力としてとらえ、長時間働きつづける姿の背後には、エネルギーとしてのやる気があるはずだという発想が見え隠れする。

やる気に対して、われわれはこのように動的なイメージを持っている。ちなみに「やる気がある知人」を思い浮かべてほしい。たとえば、「あの人は長時間残業して頑張った」「あの子は何時間も机に向かって勉強していた」「彼は会議中の発言が多い」「先生に何回も質問していた生徒がいる」「彼女はレポートを何度も書き直していた」というように、身体的な動きが活発な人を想像するのではないだろうか。静かでじっとしている人より、頻繁に動き回ったり、動作が多かったりする人のほうが活動的でエネルギッシュにみえて、モチベーションが高いと思われがちなのである。

しかし、われわれはこのような「素朴概念(注1)」をまず改めなければならない。モチベーションを理解するには、(1)この種の量的な発想だけでは不十分であり、その行為の質的側面にも着目する必要があるのだ。

モチベーションに「エネルギー性」と「方向性」という2つの要素が含まれているというのはテイセツ(イ)である。モチベーションの語源は「動き」にあると「はじめに(注2)」で述べた。その「動き」は「動力（エネルギー）」と「方向」という2要因によって説明できると考えられている。

自動車に例えるとわかりやすい。エネルギー性とは、いわばエンジンのはたらきを指し、それがなければ動かないという要因（＝動力）である。「馬力」があり加速がよい車もあれば、速度に限界がある車もあろう。このような距離や速度といった比喩は、動きの多少、強弱を左右するモチベーションの量的な側面を指す。エネルギー性とはその動力の性質にガイトウ(ウ)し、人の動きを解明するための必要不可欠な要素だといえる。

とかくわれわれはモチベーションのエネルギー的な側面に目を向けがちだ。活発に動き回るエネルギッシュな人にモチベーションの高さを感じるのは、みえやすい量的側面に着目してしまう傾向がわれわれにあるからだろう。しかし、それだけでは人の動きの説明として不十分なのである。「動き」には向かう方向が必ず伴っているからだ。

エネルギー性を象徴するエンジンに対して、方向性とはハンドルのはたらきを意味する。たとえば、エンジンの性能が同じ車であっても、北に進む車と東に進む車が同じ動きをしているとはいえない。目指す方向が違えば、動き自体の意味が異なってくる。

読書の例で考えてみよう。エネルギー性とは、たとえば、1ヵ月に本を何冊読むか、あるいは1時間に何ページ読み進められるかといった量的側面である。それに対して方向性とは、その本を趣味や教養のために読むのか、報告書作成のために読むのかといった行為の目的の違いを指す。また、同じ報告書であったとしても、社内の会議で報告するための文書なのか、営業の(エ)イッカンとして顧客に見せる資料なのかといった具体的な目標の違いを意味する。つまり、方向性とは「何のための行為なのか」という着眼点だといえよう。

人の動きはこの方向性によって決定される。会議中の発言の例でいえば、「あの人が多くの発言をしたのは何のためか」という目的や意図が問われるだろう。全体での議論を深めようとして発言する人もいれば、単に自己アピールのため、あるいはライバルの提案を却下することをもくろんだ批判という場合もあるかもしれない。だから、発言が多いという量的側面だけで、その人のモチベーションを判断してはならない。(2)「どこに向かうやる気なのか」というモチベーションの質的側面にも着目する必要があるのだ。

(3)世の中には多種多様な「車」があるが、それらは自ら動く自動車と、人が力を加えないと動かない他動車（荷車、台車、乳母車など）とに大別できる。自動車は自ら動く力を備えているのに対し、他動車にはそれがなく、押されたり引っ張られる力に頼っている。

車と同様に、人も自力で動く場合と、他の何かに動かされる場合の2種類がある。この区別については自らの体験を振り返れば理解しやすいだろう。好きな本を自ら進んで読書するというように、自分から行動を起こす場合もあれば、宿題の読書感想文のために課題図書をしぶしぶ読みはじめるというように、環境側の要因（宿題）によって行動が引き起こされる（動かされる）こともある。

このように人の行動は個人内から押し出されるようにして（押す力によって）、あるいは環境側から引っ張られるようにして（引く力によって）生じる。最もシンプルなモチベーションのメカニズムはこれである。自動であれ、他動であれ、何らかの力によって行動が引き起こされると考えるわけである。

この押す力（プッシュ）と引く力（プル）によってモチベーションを説明する枠組みはプッシュ―プル・モデルと呼ばれ、主にレジャーや観光の研究領域で取り上げられてきた（表1―1）。

たとえば、プッシュ要因として、休養したい、リラックスしたいとか、冒険心、異文化への興味などが挙げられている。表1―1には「自尊心を満たす」とか「(オ)メイセイや評判を得る」という、一見、旅行とは無関係に思える要因も挙げられているが、人によっては「マチュ・ピチュ遺跡」を訪れるということによって「こんな遠い名所まで来ることができた」と自分に誇りを感じたり、他者から「すごいね！」とほめられたりしたいといった場合がある。収入や職業といった本人の属性や、(カ)「ハンボウ期を避けて安くパリに旅行するのは来月だ」といった旅行に関する知識もプッシュ要因に分類されている。

一方、プル要因についてはどうだろう。「海が俺を呼んでいる」といったやや気取った言い回しがあるが、その意味は「海に導かれるかのごとく出向いてしまう」ということであり、文字通りにとらえれば、当人にとって海がプル要因だということになる。

表 1-1　プッシュープル・モデル：旅行のモチベーション

プッシュ要因：自らが押す力	プル要因：環境が引く力
モチベーション 日常からの逃避 休養とリラックス （A） メイセイや評判を得る 健康や体力の維持・向上 冒険 社会的な交流 幸福をもたらす利益や恩恵を受ける 興味 **社会経済的・人口統計的要因** 年齢、性別、収入、教育水準、家族のライフサイクルや人数 人種・民族 職業 別荘所有の有無 **旅行関連の知識**	**目的地の属性・滞在先のタイプ** 気候 歴史的名所 景色の美しさ 日光 ビーチ 雪 文化的イベント レクリエーションの機会 幸福をもたらす利益や恩恵が得られる可能性 （B） **状況的要因** 治安、保安、季節性 **商業的イメージ** 目的地の商業的イメージ（プラス／マイナス） サービスの質 施設の質

旅行の魅力は何といっても、見慣れた日常とはまったく異なる光景だろう。歴史的な建造物、美しい自然、祭りなどの文化的なイベント、日光とビーチというように、われわれの旅行を動機づけるプル要因として、バラエティ豊かな観光資源をまず挙げることができよう。もちろん、目的地が持つユニークな魅力だけではなく、行きやすい場所であるか、治安がよいか、さらには商業的に形成されたポジティブなイメージもプル要因になりうる。いずれにせよ環境側のプル要因に引っ張られるようにして旅行に出向くというわけである。

さらに、プッシュ要因とプル要因が同じ方向であれば、モチベーションはいっそう強まる。たまたま街角で「リオのカーニバル」の観光ポスターが目に飛び込んできたとしよう。「世界三大祭り」のひとつとされる名高いカーニバルや、美しい白浜が続くコパカバーナ・ビーチといったプル要因に加え、日常を離れて遠くへ行きたいという気持ちや異文化への興味といったプッシュ要因が同時に喚起され、両者の相乗効果によって地球の裏側にあるリオデジャネイロへの旅行計画をにわかに立てはじめるかもしれない。

(4) ただ、このプッシュープル・モデルはいささか単純で、モチベーションの説明として必ずしも十分とはいえない。押す力と引く力の二元論であるため、エネルギー性や方向性について大まかには理解できるものの、行為の始発、持続、方向づけについてまったく触れられていないからである。

(5) プッシュープル・モデルの発展形が動因モデルと誘因モデルだろう。動因（drive）によって押す力が、誘因（incentive）によって引く力が生じると考えられている。

driveは、まさにやる気や意欲と訳されることもある英単語である。

この動因という言葉を使って、モチベーションの存在を初めて明確に指摘した心理学者がウッドワース(注3)だった。まだ心理学にモチベーションという概念が確立されていない、今からおよそ100年前のことである。当時、それは人間のダイナミックな側面を説明しようとする試みとしてカッキ(キ)的だった。

彼は人の動きを説明するために「メカニズム」と「動因」の2つを区別した。彼の説明によれば、メカニズムとは「一連の行動がどのように為されるのか」(how の問い)に対する答えであるのに対し、動因とは「その行動をなぜ為すのか」(why の問い)に対する答えなのだという。

両者の違いは機械の比喩によって説明される。メカニズムがいかに立派であっても、動力(電力など)が提供されなければ機械は作動しない。それと同様に、人間もメカニズムだけでは動かない。人を行動に駆り立てるような、機械の動力に対応する説明概念が必要で、それが動因だとウッドワースは主張したのである。

例示された動因のひとつに興味がある。好奇心旺盛な子どもたちの姿をみればわかるように、興味が強力な動因となって彼らの行為(ものをいじってみたり、大人にしつこく質問したりすることなど)が活性化される。また、興味が視線などの身体の動きを引き起こし、それが知識やスキルの獲得へとつながっていく。このように動因は人間の学習や発達のプロセスにも影響を及ぼしているのだという。

典型的な動因は欲求だろう。欲求とは、カンケツ(ク)にいうなら「○○したい」と感知する心身のはたらきを指す。つまり、「個人の内側から行為を引き起こす心理的エネルギー」を意味し、その種類に応じて人を特定の行動に駆り立てたり、その行動を方向づけたりする。そしてその欲求が満たされることで快の感覚(満足)が得られる。欲求は必ずしも当人に意識されるとは限らず、無意識のうちにモチベーションを左右するという点もポイントである。

欲求の代表格が生理的欲求だ。食欲、のどの渇きを満たす欲求、睡眠欲、排せつ欲、暑さや寒さを回避する欲求(コ)、危害を回避して身体を守ろうとする欲求など、それらのジュウソク(ケ)なしには生存が危ぶまれるような各種の欲求は生理的欲求とソウショウされている。「腹が減っては軍はできぬ」ということわざの通り、他のことをやろうとしていたとしても、空腹であれば食欲を満たすことが最優先になる。生理的欲求のうち、とりわけ「呼吸欲」や「痛さを避ける欲求」などは緊急性の高い強力な動因としてはたらく。息ができない、痛いといった状態は極度に不快な状態であるため、その状態から逃れようとする強烈なモチベーションが、身体の内部から突き動かされるように生じるに違いない。

一方、環境側のプル要因は誘因とソウショウされる。誘因は今日では、「インセンティブ」というカタカナ語としてすでに普及しており、経済学や経営学の分野でも頻繁に用いられている。ボーナスや昇給といった金銭や、より上位のステータス(役職など)などを意味することが多く、そこには「インセンティブの提示によってモチベーションが高まるはずだ」という暗黙の前提があるようだ。確かにこの種の「ご褒美」は代表的な誘因に違いないが、人のモチベーションを規定するプル要因はそれだけではないという点には注意すべきだろう。旅行の例のように、ブラジル旅行を動機づける「リオのカーニバル」も立派な誘因なのだ。つまり、誘因とは当人に特定の行為を要求する環境側からのシグナルで

あり、われわれの行為を引き起こすはたらきを持つ目標対象全般を意味しているのである。

（鹿毛雅治『モチベーションの心理学』による。小見出しおよび本文の一部を省略した）

（注1）「素朴概念」……学習ではなく、日常を通して自然発生的に獲得される概念。たとえば、振り子が一往復する速さは振り子の長さによって決まるが、ブランコなどでの自身の経験からおもりの重さによって決まると考えてしまうなど。

（注2）「はじめに」……本文より前の「はじめに」に当たる部分で、モチベーション（motivation）の語源が「動かす」という意味のラテン語 movere であると述べられている。

（注3）ウッドワース……アメリカの心理学者。

問一　傍線部ア～コのカタカナで表記された語句と同じ漢字を含むものを、それぞれ次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。解答番号は 1 ～ 10 。

（ア）ホキュウ　1

① カキュウ的速やかにご対応ください
② 奨学金のキュウヒを受ける
③ 恐竜の生態についてコウキュウする
④ アルバイトのキュウジン広告
⑤ コンキュウ家庭への支援を進める

（イ）テイセツ　2

① 社会問題をテイキする
② 三角形のテイヘンの長さ
③ 航空機がテイクウを飛行する
④ 気に入った土地にテイジュウする
⑤ 活動を一時的にテイシする

（ウ）ガイトウ　3

① ガイハクな知識をもとに議論する
② ガイヨウは私から説明します
③ ショウガイの思い出をつくる
④ 裁判官のダンガイ手続き
⑤ ジツガイはないが対応に追われる

（エ）イッカン

4

① 見張りがカンシ台に上る
② 鉄道が町の中をカンツウする
③ 本書カンマツの解説をご覧ください
④ タイトル戦に負けてムカンとなる
⑤ 水が地球上をジュンカンする

（オ）メイセイ

5

① 彼女はわたしの昔からのメイユウだ
② チームのメイウンを託す
③ 「時は金なり」とはメイゲンだ
④ 好きなメイガラの果物
⑤ メイオウ星はかつて惑星だった

（カ）ハンボウ

6

① 水草があちこちにハンモする
② 幕末期のユウハンである薩長土肥
③ 世界をまたにかけたコウハンな活動
④ 高圧的な言い方にハンパツする
⑤ 希望者に無料でハンプする

（キ）カッキ

7

① 議論のカクシンをついた発言
② 試してみるカッコウの機会だ
③ 今となってはカクセイの感だ
④ 陰であれこれカクサクする
⑤ カッコたる地位を築く

（ク）カンケツ

① カンキャクが大勢押し寄せる
② カンショクのとりすぎは健康によくない
③ マンションのカンリ費が上がる
④ カンダイな措置にお礼申し上げます
⑤ 手続きを以前よりカンベン化する

8

（ケ）ジュウソク

① 事故ジュウタイに巻き込まれる
② ジュウジ路の先に目的地がある
③ ジュウナンな考えで取り組む
④ ジュウオウ無尽の活躍を見せる
⑤ 消耗品をホジュウしておく

9

（コ）ソウショウ

① ソウショク品でかざりつける
② それはタイソウめでたい話だ
③ ユウソウな行進曲が流れる
④ ソウゴウ的に判断を行う
⑤ ピアノとバイオリンでガッソウする

10

問二　傍線部（1）「この種の量的な発想だけでは不十分であり、その行為の質的側面にも着目する必要がある」とあるが、「質的側面」の説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 11 。

① エネルギー性を象徴するエンジンだけを見ていてはわからない、ハンドルのはたらきのように、エネルギーの出力量をコントロールする部分。

② それがなければ人は動かないという動力の性質に当てはまり、加速のよさ、速度の限界などを明らかにする、人の動きを解明するために不可欠な部分。

③ 同じ読書をする場合でも、趣味や教養のために読んだ方が、報告書作成のために読むよりも熱意をもてるという、エネルギーの質を決める部分。

④ 報告書作成のために読書をするなどの目的や、社内の会議で報告することをめざすなどの目標といった、その行動を何のためにするのかを指す部分。

⑤ 会議中の発言の例でいえば、自己アピールのため、あるいは他人の提案を却下するために批判してはいけないという、価値判断を含んだ部分。

問三　傍線部（2）「「どこに向かうやる気なのか」というモチベーションの質的側面にも着目する必要がある」とあるが、その理由として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 12 。

① 「24時間、働けますか」など、ビジネスマンのやる気を起こさせようとするコマーシャルのように、モチベーションをエネルギーとしてとらえること自体、モチベーションの取り扱いとして問題があるから。

② 頻繁に動き回ったり、動作が多かったりする人の方が活動的でエネルギッシュにみえるが、そういった人の方がモチベーションの量が多いとは必ずしもいえないため、モチベーションの様子を別途調べる必要があるから。

③ エンジンの性能が同じ車であっても、北に進む車と東に進む車が同じ動きをしているとはいえないように、エネルギーの量が同じであっても、向かう方向が違えば、それは同じエネルギー量とはいえないから。

④ 車でいえば、どれくらいの「馬力」があり加速がよいかという量的側面だけではなく、ハンドルのはたらきがどれくらいよいかという質的側面まで見た方が、よいモチベーションをもった人を適切に選別できるから。

⑤ 1時間に何ページ本を読むか、会議中に何回発言するかといった量的側面だけでは、その人のモチベーションのあり方を判断できないため、モチベーションの向かう先についても考えてみる必要があるから。

問四　傍線部（3）「世の中には多種多様な「車」があるが、それらは自ら動く自動車と、人が力を加えないと動かない他動車（荷車、台車、乳母車など）とに大別できる」とあるが、ここで「自動車」「他動車」を話題に出す効果として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 13 。

① このあとの議論に関わる比喩的な例を示し、内容の理解を助ける効果。

② それまでの議論をまとめることで、このあとの展開を伝えやすくする効果。

③ 自らの主張への反論を予想し、未然にそれに答える効果。

④ それまでとまったく異なる具体例を出すことで、読者の興味を引く効果。

⑤ 対比的な例を示すことで、例がなくては伝えられない事柄の特徴を伝える効果。

問五　表1―1について、（A）（B）に当てはまる具体例の組み合わせとして最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 14 。

① （A）安価に泊まる　（B）好きなものとの共通点
② （A）郷土料理を味わう　（B）専門との結びつき
③ （A）自尊心を満たす　（B）アクセスのしやすさ
④ （A）レジャーを楽しむ　（B）苦手なものの克服
⑤ （A）自信を深める　（B）趣味との関連づけ

問六　傍線部（4）「ただ、このプッシュープル・モデルはいささか単純で、モチベーションの説明として必ずしも十分とはいえない」とあるが、こういえる理由として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 15 。

① 人の行動は、「こんな遠い名所まで来ることができた」といった自分への誇りや、「すごいね！」という他者からの賞賛、さらには収入、職業、知識といった理由だけで説明できるわけではないから。
② 「海が俺を呼んでいる」といったやや気取った言い回しでは、「海に導かれるかのごとく出向いてしまう」という、一連の行為がどのように為されるのかの説明がむずかしいから。
③ プッシュ要因とプル要因が同じ方向であれば、モチベーションはいっそう強まるが、そのような状況はそれほど多くなく、その二つの要因だけで人の行動を引き出せると考えるのは楽観的すぎるから。
④ 「リオのカーニバル」の観光ポスターを見てプッシュ要因とプル要因が同時に引き出されることがあるように、両者を客観的に区別するのはむずかしく、丁寧な議論をすることがむずかしいから。
⑤ プッシュープル・モデルによってwhyにあたる部分の説明は一定程度可能であるものの、whyの中でも、人はどのように行為を始めてどのように続けるのかという部分については説明できないから。

問七　傍線部（5）「プッシュ―プル・モデルの発展形が動因モデルと誘因モデルだろう」とあるが、ここでいう「動因」や「誘因」に関する説明として本文の内容に合致するものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 16 。

① 動因とは英語でdriveといい、機械でいうメカニズムのうち人を行動に駆り立てる部分、言い換えれば「その行為をなぜ為すのか」というwhyの問いに対する答えのことを示す。

② 動因の一例として興味と呼ばれるものがあるが、これは子どもがものをいじってみたり、大人にしつこく質問したりといった、「～したい」という本人も自覚していない意識のことである。

③ 動因の代表格が欲求、とくに生理的欲求であるが、この中には食欲やのどの渇きを満たす欲に加え「呼吸欲」や「痛さを避ける欲」などがあり、他の欲求よりいかなる場合も強力な欲求である。

④ 誘因とは環境側のプル要因のことであり、一般的には「インセンティブ」というカタカナ語で普及しているが、実際にはブラジル旅行を動機づける「リオのカーニバル」といった環境側のシグナルのことを指す。

⑤ 誘因は今日では「インセンティブ」とも呼ばれることがあるが、ボーナスや昇給、より上位の役職につけるといったことは本来含まれず、われわれの行為を引き起こす目標全般のことをさす。

問八　次の小問【1】～【3】に答えなさい。

【1】以下は、本文をもとに「X町の観光を盛り上げるための企画案とはどのようなものか」について五人の高校生それぞれが意見を述べたものである。本文の内容を最もよく理解していると思われるものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 17 。

① 生徒A　PRの効果を最大限にするためには、利用者本人の意欲を高めるためにも、「この町は歴史的名所がたくさんある」というプッシュ要因を前面に押し出す必要があるね。

② 生徒B　旅行をPRするときには、観光先の魅力をアピールするプル要因だけでなく、「自然豊かな環境でヘルシーに過ごしたい」というプッシュ要因にも働きかけると効果的ということだね。

③ 生徒C　プッシュ要因だけでなくプル要因を打ち出すためには、「X町には素晴らしいビーチがある」「冒険心を満たしたい」というプル要因を打ち出すアプローチが有効だね。

④ 生徒D　プル要因を打ち出すためには、「この町を見つけたあなたは見る目がある」という、広告を見た人本人の自尊心をくすぐるようなアピールをするのがいいね。

⑤ 生徒E　「非日常的な冒険がしたい」という思いと、「ストレスを解消したい」という思いの両方に応じると、プッシュ要因とプル要因の両方に働きかけられるね。

【2】五人の高校生は、X町の観光を盛り上げるための企画案について、古き良き伝統を感じられる「二月祭」をプル要因として打ち出す企画案でまとまりかけている。それを受けて五人は、この企画の問題点についてそれぞれ意見を述べている。本文の内容を最もよく理解していると思われるものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 18 。

① 生徒A　この企画案だと、そもそも人はどうしてモチベーションを持つのかという原因の議論が足りていない気がする。本当に魅力的な企画案にするためには、どうしたらプッシュ要因とプル要因の両方に働きかけることができるか、その効果的な方法をさらに考察するのがいいのではないかな。

② 生徒B　この企画案だと、そもそも人は「二月祭」のどんなところに魅力を感じるのか、どうしたら「二月祭」に来てみたいというモチベーションを維持できるかについての議論が不足しているよ。モチベーションはどのように分類できるかだけではなく、モチベーションはなぜ生まれるのかも検討する必要があるね。

③ 生徒C　この企画案だと、モチベーションが生まれるメカニズムは踏まえていても、人の心理のもっとダイナミックな部分については十分理解できていない。もっと人を行動に駆り立てる動力の説明、つまりhowの問いに答える必要がある。具体的には、人はどんなことに興味をもつか、どんな欲求をもっているのかについて考えたいな。

④ 生徒D　この企画案だと、プッシュ―プル・モデルの話にとどまって、モチベーションがなぜ生まれるかを理解できていない点に問題があると思う。ウッドワースがいうように、モチベーションという用語に立ち戻って、そもそも人間が何かをしようとするエネルギーとはどんなものなのか、あらためて考えてみる必要があるよ。

⑤ 生徒E　この企画案だと、人がその場所に旅行したいと思うのはなぜなのか、理由が十分理解できていないと考えられるよ。このためにはプッシュ―プル・モデルを発展させて、人はどれくらい、どのような方向にエネルギーを出すのかをあらためて考える必要がある。たとえば、そもそも人はなぜ旅行に魅力を感じるのか考えよう。

【3】以下は、X町の観光を盛り上げるための企画について、五人それぞれが改善案を述べたものである。本文の内容を最もよく理解していると思われるものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 19 。

① 生徒A　どんな企画が人の動因になるか考える土台として、人間の欲求について考えてみることが必要だ。人間は欲求のないことをしようとは思わないから、まず個人の内側にある欲求を明らかにする必要があるよ。

② 生徒B　動因に十分はたらきかける企画を考えるために、人間の生理的欲求に訴える動画を公開しよう。生理的欲求が最も強い要求であるとすれば、そのような欲求が不可欠な状況にすることで参加者が増えるといえるよ。

③ 生徒C　どんな企画が動因になるか探るために、利用者の興味を探る調査をする必要があると思う。なぜなら利用者がどんなことに興味をもっているかわからないと、どんなプッシュ要因を活用すればいいかわからないから。

④ 生徒D　企画の要因として、金銭のキャッシュバックなどのキャンペーンを行うことが有効だ。これらは「インセンティブ」と呼ばれることからわかるように、問題はあるけれど、最も強力に行動の誘因になるものだからね。

⑤ 生徒E　誘因が十分にある企画をするために、人々の興味を引く表現を募るコンテストをしよう。いま企画を考えている地域には「リオのカーニバル」はないけれど、工夫すれば、カーニバルに来たい人も集まるはずだよ。

問九　本文の構成や表現の特徴として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 20 。

① 具体例を多く用いて、心理学の用語についての読者の理解を助けようとしている。
② カギカッコを多く用いて、専門用語であることを読者に分かりやすく示している。
③ 問いかけを多く用いて、話題の中心をわかりやすく明示するよう努めている。
④ 実験のデータを多く用いて、実証的な議論になるよう工夫している。
⑤ 引用を多く用いて、議論の責任の所在が元の書き手にあることをはっきり示している。

〔選択問題〕〈現代文〉か〈古文〉かの、どちらかを選択して、一方のみを答えなさい。

〔二〕〈現代文〉次の文章は、校正について書いた本の一部である。これを読み、後の問いに答えなさい。

本の校正という仕事があることは小さい頃から知っていました。両親が同じ仕事をしていたからです。

業務委託契約で十年勤めた出版社の校閲部では、数十人の社員に加え、その倍近い人数のわたしのような外部校正者が働いていました。目を通すのは本や雑誌のゲラ(注1)に限りません。本に挟み込まれる広告チラシや読者ハガキ、新聞広告、ウェブサイトやメールマガジンにいたるまで、原則校閲を通してからでなければ世に出ない。(a)それがあたりまえだと思っていました。あたりまえではないと知ったのは、会社の外で本の出版記念イベントに参加するようになってからです。

使い始めたばかりのSNSで存在を知った近所のブックカフェ。当時は出版記念イベントが毎週のように開催されていました。著者や編集者ができあがったばかりの本を手に制作の舞台裏を語る。本はこんなふうに作られているのだと、自分自身その一端に関わっているはずなのに知らなかった。もっと知りたくて同じようなイベントを探しては足を運ぶようになりました。本を作るといっても出版社や編集者によってやり方は違うこと、校正専門の部署のある出版社より、ない出版社のほうが圧倒的に多いこと、専門職による校正を経ることなく出版されている本もたくさんあること、初めて知ることばかりでした。校正の仕事をしていると話すと、この本は校正を入れていなくて……と申し訳なさそうにする編集者がいることも。

そうした場で知り合った編集者に声をかけられて、個人でも書籍の校正を請け負うようになりました。会社で机を並べている外部校正者の中には複数の出版社を掛け持ちしている人も珍しくありませんでしたが、まさか自分がそうなるとは。編集者と直接やりとりをするのも初めての経験でした。(中略)

校正は減点方式の仕事だといわれます。新聞の校閲記者は「サッカーに例えるとゴールキーパー」と表現しています。「『0点に抑える』ことが至上命令」で、「99回横っ跳びでスーパーセーブをしようとも、たった1本シュートを入れられたら、キーパーにとっては『負け』」なのだと。会社では初校、再校と何人もで目をかえてひとつのゲラを読みます。自分が落としても誰かが拾ってくれる。キーパーが大勢いる安心感にあぐらをかいて仕事をしていました。個人で受けた仕事はそうはいきません。ゲラを読むのは一回きりということもありますし、自分が落とせばもちろん誰も拾ってはくれない。

一個たりとも誤植を残すまいと思いながらゲラを読んではいますが、どんなに必死に仕事をしても、できあがった本に何か残っているのではないかという不安が消えることはありません。こんないいかたは誤解を招くかもしれませんが、(b)残っているはずだといいたいくらいです。会社

ではこの道何十年というベテランがよってたかってゲラを読んでいるのに、それでも誤植が残ってしまうことはある。だから自分の校正した本にひとつも誤植は残っていませんとは、わたしにはいえない。そういえるよう努力すべきなのだと理解はしていますが、どうしてもいえないのです。実際、あなたの担当した本にこれだけの誤植があったと読者に目の前で数え上げられたこともあります。（中略）

担当した本にはどれも思い入れがありますが、初期の仕事で忘れがたい一冊があります。ひとりで読むことにまだ慣れていなかったうえ、自分自身興味関心のあるテーマ――本と書店――を扱っていたので、とりわけ肩に力が入っていました。刊行後、著者の希望で編集者を含む三人で話をする場が設けられました。担当した本の著者と対面するなど初めてのことです。本に書かれていないこと、書ききれなかったことを直接聞く機会を得て、強く思いました。世に出す価値のある本、後世まで残す意義のある本だと。でも、なかなか重版がかかったという声は聞こえてきませんでした。

どんなに力を入れて作った本であっても、読者に手に取ってもらえないことには始まらない。本を作るということのゴールは読者の手に渡ること、読まれること。読まれることで初めて本として完成するとさえいえるのではないかと、考えるようになったのはそれからです。（中略）

校正を通している本かそうでないか、ぱっと見ではわかりにくい。先に書いたように奥付(注2)に校正の有無を載せない方針の出版社はいくらもあります。有機(注3)ＪＡＳマークのような表示があるわけでもなく、本の品質を担保するために一回以上校正を通していない本は出版できない、なんていう法律もありません。

見ただけではわからない、では読めばわかるかといえばこれまた難しい。当然といえば当然ですが、校正を学ぶためのテキストに載っている練習問題のような、誰の目にも明らかな「間違い」が頻出する本はめったにありません。校正を通していなくても読者にとってはさしたる問題ではないと感じられる本のほうが多いのではないでしょうか。専門職としての校正者がいなくても、著者や編集者が精魂傾けて校正をしている出版社、独自の工夫や仕組みを持っている出版社はたくさんあるはずです。校正を必要としないくらい完成度の高い原稿を書く著者がいることも、実感として承知しています。

そもそも、(c)本にはなぜ校正が必要なのでしょうか。誤植をなくすため？　誤植とはそんなに悪いものなのでしょうか。

誤植の有無が刷り直しなど具体的なペナルティに直結する商業印刷校正のような現場では、もちろん誤植はあってはならないものです。ミスを紙面化しないために昼夜の区別なく業務に従事している新聞の校閲記者のような人たちもいる。でも、自分が読んできた本をふり返ってみると、誤植があることが本の価値を下げるかといえば、そうとはいいきれないようにも思えました。

固有名詞や数字が間違っていたり、事実とは異なった内容が書かれていたりすることで、不利益や損害を被る人がいる。それはもちろんあってはならないこと、防がなければならないことです。しかし、誤植があっても読者にとっては有益な本、かけがえのない本であるということは、珍しくないのではないでしょうか。

一方で、誤植が限りなくゼロに近かったとしても、ある人にとっては有害であるといわざるを得ない本もある。読む人を傷つける、特定の属性を持つ人たちへの差別や偏見を助長するような内容の本がそれに当たります。校正はそうした表現や内容に対しても目を配ることが求められています。日頃から本を読み、報道を追って勉強に努めているつもりではありますが、自分の常識や倫理観が時代に合わせて常にアップデートできているかと問われると、自信がありません。校正者の意見と、著者や編集者、版元の意見が一致しないこともあります。また、関係者全員が細心の注意を払い、考えに考えて作った本であっても、誰かを傷つけてしまうことがまったくないとはいいきれない。本が言葉である以上、誰のことも絶対に傷つけることがない本を作るのは不可能ではないかと思います。

しかし、こうなってくるとますます「なぜ校正は必要なのか」という問いに答えることが困難になってきます。

校正を入れることの意義は目に見えにくい。なぜなら何も問題がないといえるのが校正が十全に機能した結果だからです。校正を入れなかったことによってなんらかの問題が起こって対応を迫られたり、場合によっては回収や刷り直しという現実的な損害を被ることもあるかもしれない。でも、校正が機能しているときには何も起こりません。読者から「この本の校正は素晴らしかったです」という声が上がることもなければ、売り上げが伸びるわけでもない。何も起こらないことこそが目標であるところに、校正を評価する困難さがあるように思います。入れても入れなくても傍目（はため）には変わらない。入れたところで目に見える効果を挙げるわけでもない。でも入れるとなればお金も時間も必要になる。予算が潤沢でスケジュールにもたっぷりとゆとりがあれば（そんな本作りに参加したいものです）、躊躇（ちゅうちょ）なく入れる選択ができるかもしれませんが、いま、それほどの余裕を持つ出版社がどれくらいあるでしょうか。本という魂に肉体を与えるブックデザインの現場でさえ、予算の制限が理由でできないことが増えているといいます。印刷や製本の現場からは無理を強いられ耐えているという声も聞こえてくる。書店員の知人たちは店頭で見かけても話しかけることがためらわれるほど忙しく立ち働いているように見えますが、恵まれた待遇とはいえないようです。

そんな中で校正が本作りに欠くことのできない職業として成り立つために、いったい何ができるのでしょう。いつもこの問いに戻ってきてしまうのです。

校正は［A］だというたとえがあります。［B］を用意し訓練をして、実際には役立つことのないまま月日が過ぎていくのならそれに越したことはありません。［C］から慌てても遅いように、ひとたび印刷され製本されて本という形になり、世に出てしまった言葉は取り返しがつきません。あとから書き直したり訂正したりはできないから、あらかじめ備えておきたい。

では、校正はいったい何から本を守っているのでしょう。

世の中には校正をしていない本もあるという話をすると驚かれることがあります。誤植が問題になったときに、校正は何をやっていたんだといわれることもあります。本は校正をされているもの、間違いがなくてあたりまえのものだと思われている。裏を返せばそれは、本が信頼されているということではないでしょうか。その信頼はどのようにして培われてきたかといえば、これまでに世に出た数多の本の積み重なりです。

日頃から本は間違いだらけで信用できないものという認識が読者に共有されていたなら、いちいち誤植が話題になったりはしません。多くの読者にとって、本とは安心して読めるものなのです。その信頼を失わないために、損なわないために、やはり校正はあってほしい。

本を読んでいて誤植があると、散歩をしていて小石に蹴つまずいたような気持ちになる、といわれたことがあります。転ぶまでにはいたらなくてもひやりとして、それまでの静けさは消えてしまい、容易には戻ってこない。

叶(かな)うならすべての本に校正が入っていることがあたりまえになってほしい。本を作るときに校正を入れるべき本と入れなくてもよい本とを分けようとすることは、本の価値をあらかじめ決めようとする行為に思えてならないのです。本の価値は作り手に左右される部分もありますが、読者によって決まる部分もおおいにあるのではないでしょうか。これまで個人で百冊以上の本に携わってきましたが、わたしにとっては百冊のうちの一冊でも、読者にとっては人生で唯一の一冊になるということはあり得るのです。本はかならずしも意図したように読まれるとは限らない。誰かにとっては無数の本の中の一冊に過ぎないとしても、誰かにとってはかけがえのない一冊である。その価値を否定することは誰にもできない。著者自身でさえも。歳月を経て、刊行されたときに想定されていたのとは違う意味と価値を持つこともあります。本は人間よりも長く生きるのです。そうした可能性を考えたとき、すべての本が等しく手をかけて作られていてほしい。理想論かもしれませんが、そう願わずにはいられないのです。

（牟田都子『文にあたる』による。本文の一部を省略した）

（注1）ゲラ……製本する前に校正のために印刷されたもののこと。

（注2）奥付……本の巻末に、著者名などその本の情報を記載したもの。

（注3）有機ＪＡＳマーク……農薬や化学肥料を使わないなど一定の基準を満たした農産物や加工食品などに付けられるマーク。

問一　傍線部（a）「それがあたりまえだと思っていました。」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 21 。

① 本以外の広告やウェブサイトやメールマガジンといったものまで校正を行う大きな出版社に勤めていたため、出版社は校正を済ませた上で本を出版する義務があると信じていたから。

② 子供の頃から本に親しんでいた著者にとっては、本に校正という作業がなされていることはあまりにも当然のことであり、すべての本には校正がなされるべきだと思っていたから。

③ 本が出版されたときに行われる記念のイベントにこれまで参加したことがなく、校正という仕事を行う中で、他の人と本について話す機会がなかったから。

④ 校正者は担当する本の校正に専念するべきだという職業意識を持っていた著者にとって、自分が担当した本を読んで楽しむということは考えもしないことだったから。

⑤ 著者の両親が校正の仕事をしており、校正が日常の風景の一部としてあっただけでなく、校正以外の出版物の全体の行程について考えることがなかったから。

問二　傍線部（b）「残っているはずだといいたいくらいです。」とあるが、筆者がこのように述べるのはなぜか。その理由として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 22 。

① これまでどれだけ慎重に校正という仕事にあたったとしても、誤植がなくならなかったという著者自身の経験を踏まえて、人間の目による校正に対して信頼感を持てないから。

② 校正という仕事は単純なものではなく、熟練の校正者でも誤植を見逃してしまうことがあるように、校正によって、本の誤りを完全になくすことなどあり得ないという思いがあるから。

③ 出版物における校正の重要性は認識され続けてはいるものの、予算やスケジュールの問題から、必ずしもすべての本に校正がなされているわけではないという現状を著者は憂慮しているから。

④ 出版社で校正を担当するだけでなく、個人でも校正を請け負っており、さまざまな校正の実態に触れてきてはいるものの、膨大な出版物のすべてを知ることはできないという思いがあるから。

⑤ 必死に校正にあたってはいるものの、予算や日程といった出版社の都合や、著者の意向などが関係することがあり、状況によっては万全を期すことができない場合があるから。

問三　傍線部（c）「本にはなぜ校正が必要なのでしょうか。」とあるが、本文中で示されているその答えとして最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 23 。

① 校正とは、単に文字の誤りを直すだけの行為にとどまらず、誤りの無い本を世の中に出し続けることによって、校正が存在することの価値を出版社や読者に気づかせる行為でもあるから。

② 校正とは、単に文字の誤りを直すだけの行為にとどまらず、無意識の差別や偏見を表明している本が世の中に流通することにストップをかけ、著者や出版社に注意を促す行為でもあるから。

③ 校正とは、単に文字の誤りを直すだけの行為にとどまらず、本には間違いがないはずだという、本がこれまでかちえてきた人々の信頼の蓄積を継承していく行為でもあるから。

④ 校正がなされず、事実誤認の本が出てしまうことで、回収や刷り直しなどの措置をとり、出版社や書店に経済的損失を生じさせてしまうだけでなく、良書の存在意義を低下させてしまうから。

⑤ 校正がなされず、事実誤認の本が出てしまうことで、メディアとしての本の信頼性を揺るがすことになるだけでなく、それにより印刷や製本、書店などの現場で働く人々の環境が悪化してしまうから。

問四　空欄 A 、 B 、 C に入る言葉の組み合わせとして最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 24 。

① A スポーツ　B 道具　C 本番が近づいて
② A 成績　B 過去問　C 試験がはじまって
③ A 防災　B 防災グッズ　C 災害が起こって
④ A 料理　B 食材　C 来客があって
⑤ A 常備薬　B 薬　C 発熱して

問五　傍線部（d）「すべての本に校正が入っていることがあたりまえになってほしい。」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 25 。

① 半永久的に残る重要なメディアである本については、作り手が手間暇をかけてつくってほしいと考えている著者にとって、校正を入れることは未来の読者に対する責任だと考えているから。

② 本には間違いがないということをもっとも重視する筆者にとって、校正がなされないまま本が出版されてしまうことは、本に間違いがないはずという読者の信頼を揺るがしてしまうことになるから。

③ 本に事実の誤りや誤植が見逃されたまま出版されることで、その本を読んでいる読者の読書の進行が妨げられることになり、本に没頭して読む楽しみを奪うことになってしまうから。

④ 校正のなされていない本が多く流通し、それが出版界の主流になり、読者もその状況を受け入れてしまうと、校正者の存在意義が疑われてしまうことになるから。

⑤ 本の価値は、読者が決めるものだと考えている著者にとって、本に校正を入れるか入れないかということによって、その本の価値を読者が手に取る前に決めてしまうことになるから。

〔二〕〈古文〉次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

白河院(注1)、鳥羽(注2)におはしましけるとき、北面(注3)の者どもに、受領(注4)、国へ下るまねせさせて、御覧あるべしとて、国司には玄蕃頭ひさのりといふものをなして、衣冠(注5)に衣出して、そのほか五位どもには前駆せさせけり。おのおの、錦、唐綾を着て、(1)劣らじとしけるほどに、左衛門尉行遠、(2)心ことに出でたちて、(3)「人にかねて見えなば、目馴れぬべし」とて、御所(注6)近かりける人の家に入りて、従者を呼びて、「やをら、御所の辺にて、見て来」といひて、参らせてけり。

無期に見えざりければ、「いかに、かくは遅きにや」と、(4)「辰の時とこそ催しはありしか。さらむ定、(5)午、(6)未には渡らむずらむものを」と思ひて、待ちゐたるに、門の方に声して、「あはれ、ゆゆしかりつるものかな」といへども、「ただ参るものなどぞ」と思ふほどに、「玄蕃頭の国司の姿、をかしかりつるものかな」「藤左衛門殿は錦を着たり」「源兵衛尉は継物を金の文つけて」など語る。

あやしくおぼえて、「やおれ(注7)」といへば、この「見て来」といひつる男、うち笑みて、「おほかた、かばかりの見物さふらはず。賀茂の祭もことうるはしく、なにともおぼえさふらはず。院の御桟敷の前、渡しあひたまひつるさま、目も心も及びさふらはず」といふ。「さて、いかに」といへば、「はやう果てさふらひぬ」といふ。「それをば、いかに来て告げぬぞ」といへば、「こはいかなることにかさふらふらむ。参りて見て来とさふらへば、目もたたかず、よくよく見てさふらふぞかし」といふ。(7)おほかたとかくいふにもたらず。

「行遠が進奉不参、かへすがへす奇怪なり。たしかに召し籠めよ」とおほせ下されて、二十日あまりさふらひけるほどに、この次第をきこしめして、笑はせたまひてぞ、召し籠め許りてさふらひける。主従ともにおろかなりけるものかな。

（『十訓抄』による）

（注1）白河院……白河上皇（一〇五三～一一二九）。
（注2）鳥羽……鳥羽殿。今の京都市伏見区にあった離宮で、白河院の御所があった。
（注3）北面の者ども……院の御所の北面に詰めていた武士たち。
（注4）受領……国司。
（注5）衣冠……公家の略式の礼装。
（注6）御所……白河院の御所。
（注7）やおれ……おい、こら、と呼びかけることば。

問一　傍線部（1）「劣らじとしける」、（2）「心ことに出でたちて」の現代語訳として最も適切なものを、次の中からそれぞれ一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は（1）は 26 、（2）は 27 。

（1）劣らじとしける

26

① ほかの者に劣りそうであった
② ほかの者に劣らないであろうと思われた
③ ほかの者に劣るまいとした
④ ほかの者に劣ってはならないとした
⑤ ほかの者に劣らせようと思った

（2）心ことに出でたちて

27

① 一風変わった趣旨を考え出して
② 格別趣向をこらして身支度を整えて
③ 一見風変わりな趣の装束を着て
④ 奇抜な装いをもって参上して
⑤ いつもと違う気持ちで外出して

問二　傍線部（3）「人にかねて見えなば、目馴れぬべし」とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 28 。

① 参加できかねると院に思われたなら、院へのお目通りはかなわなくなるだろう、ということ。
② 始まる前に人に姿を見せてしまったら、新鮮味がなくなってしまうだろう、ということ。
③ 人に様子を予期していると見られたなら、ありふれたものと思われてしまうだろう、ということ。
④ 本番前に公衆の前で姿を現わさなければ、慣れ親しんでもらえなくなるだろう、ということ。
⑤ 人に国司を兼務していると思われれば、きっと熟練の者と受け取られるだろう、ということ。

問三　傍線部（4）「辰」、（5）「午」、（6）「未」とあるが、どの時刻に当たるか。最も近いと思われるものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、番号で答えなさい。解答番号は（4）は 29 、（5）は 30 、（6）は 31 。

① 午前六時頃　② 午前八時頃　③ 午前十時頃　④ 正午頃　⑤ 午後二時頃　⑥ 午後四時頃　⑦ 午後六時頃

問四　傍線部（7）「おほかたとかくいふにもたらず」とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 32 。

① 行遠は従者がとても忠実に行遠の下した命令を遂行したのでもう何も言うことはなかったということ。
② 行遠は従者が自分の下した命令の意味を取り違えたのでさんざん叱ったが甲斐はなかったということ。
③ 行遠は従者が自分のことばをどうとらえたかを知って言うべきことばがみつからなかったということ。
④ 従者は行遠に言われたとおりに行列を偵察し、その報告は不足な点のないものであったということ。
⑤ 従者は行遠に行列の様子のすばらしさをつぶさに報告したが、それでも十分な報告ではなかったということ。
⑥ 従者は行遠になぜすぐ来なかったか聞かれたものの、あまり満足な答えができなかったということ。

問五　本文の内容に合致するものを、次の中から二つ選び、番号で答えなさい。ただし、解答順は問わない。解答番号は 33 ・ 34 。

① 白河院はあるとき、北面の武士たちに国司が任国へ下る折を模した行列をさせたが、その行列はきわめて華やかで人目を楽しませるものであった。

② 行遠は国司を模した行列に参加することになっていたので、慎重に準備し、従者に周りを偵察させたうえでやや遅れて参加したが、結果、白河院の怒りを買った。

③ 行遠の従者は、国司を模した行列の様子を見てくるよう行遠から言われ、しっかりと行列の様子を見ていたため、なかなか行遠のもとに戻ってこなかった。

④ 白河院は国司を模した行列の趣向を思いついた折、行遠に先に相談していたため、行遠に多大な期待を寄せており、その寵愛を裏切る行為を許せなかった。

⑤ 白河院が国司の任国に下る折を模した行列を主催したとき、玄蕃頭はきらびやかな装束を着て行遠の従者とともに京の街中を回り、人々はその華やかさに驚嘆した。

⑥ 行遠は良い従者に恵まれなかったわけではないが、行遠の従者が行遠の命令を誤解したために白河院の命に背くことになり、白河院に愚か者扱いされた。